桜恋

さくら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
桜恋

【Ｎコード】
Ｎ２８８９Ｐ

【作者名】
さくら

【あらすじ】
主人公、上山凛は転入してきた白井雄真にだんだん引かれていく。雄真と凛のドキドキの恋物語！！

春　～桜～（前書き）

また、恋愛ものを書いてしまいました。

変なところもあるかもしれませんがどうかお気になさらずに・・・

＾＾

この小説を読まれるまえに

『私が語る私の恋』を読まれたほうが後が分かると思います。

あ、読まなくても全然大丈夫です。

春　～桜～

「あ！私の好きな桜の花だー！！！！」

時は、桜の舞う４月

私、上山　凛は明日から5年生になる。

「凛ー早く行かなきゃ遅れるよっ！」

「あ、まどかーごめんごめん」

まどかとは私の親友の林まどかちゃん。

「凛！早く新しい5年の教室に行かなきゃ！！」

「あ、あぁぁうん！！」

キーンコーンカーン・・・

「私は、境美奈子です。これから1年間よろしくお願いします！」

よかった、優しそうな先生だー

「では、転入生を紹介します。」

「一人目は『白井雄真』くん、２人目は、『大木恵梨香』ちゃんです。

みんな！仲良くしてあげてね」

「はーい」

大して興味はなかった。

まだ、その頃は・・・

春　～桜～（後書き）

また私の恋をテーマにしてしまいました！！

『私が語る私の恋』のおまけみたいな感じです＾＾；

これから6年生の現在まで書いていきたいと思います。

ちょっと、『私が語る私の恋』とは、

大分状況が変わってきましたのでそれをどんどん小説にしていきたいと思います。

惹かれ合い（前書き）

これからどんどん雄真と凛が惹かれあっていきます、

でもその先には――――――？

惹かれ合い

「席替えをしますよー、皆さんよくがんばってるからね」

「はーい」

やった、席替えっ！！こんなやつの隣なんかもううんざり！

席替え♪席替え♪

「上山さん？くじ、引いてください」

「え？あぁぁぁあ、はい！！」

えっと、何番かな？・・・3番？

「席を移動してください、ここでも譲り合いが大切なんですよー」

「はーい！」

ガタッ

げっ！隣コイツ？ま、いっか、

で前は、、、ゆっ雄真くん？！喋ったことないよー

斜め前は・・・えぇぇぇぇぇぇ花ちゃぁん？

嫌だ、最低の席じゃん、
花ちゃんと仲悪いのにー

～次の日～

「おっはよー」

「おはよう、花ちゃん」

ここは花ちゃんにも挨拶しとかなきゃな・・・っと

「・・・おはよう！凛ちゃんって以外と優しい人なんだね！！！

友達になろっ」

えぇぇぇこーゆう展開ってあり？！

「え、もう友達じゃん？」

「凛ちゃんって怖い人だと思ってた！ごめんね、それとよろしくー」

「あ、うん」

ん？花ちゃんから逃れる為に・・・えーっと

あ。雄真君だ！よし

「雄真君、おはよっ」

「・・・」

すごい目つき！怖いよ・・・そんな睨まなくても・・・

私は思いっきり目を瞑った

「・・・はよ」

へ？結構良い人なんだぁ

「フゥ」

～そして帰りの準備～

「プリントまわしますよー」

「ふぁーい」

「・・・」

ねっむーい、寝よ・・・

「おい！」

「えぇ？！はい？」

「プリント！」

「あ、ありがと」

そのとき雄真君の手からプリントが落ちた、

「あ・・・」

「ぷっ・・・」

私は笑いをこらえながら、プリントを貰った、

落としたとき、雄真君が私の顔をジッっと睨んで

何もなかったかのように前を向いた。

今の、何だったの・・・？

その次の日から私と花ちゃんと雄真君は喧嘩しながらも

仲は深まっていき、ついには私・・・雄真君のことを好きになって

しまった・・・

それはもう、7月半ばのことだった。

それからだ、私が不登校になりはじめたのは・・・

惹かれ合い（後書き）

少しずつ、1年前のことを思い出しながら書いています、
雄真君と、凛の関係がすごく懐かしく思えます。あの頃は雄真君のことを
今に至るまで好きだったんだなぁ・・・と、

不登校と恋の嵐（前書き）

ここからは、私が病み期だった頃ですね、雄真君との関係、果たしてどうなるのでしょうか？

不登校と恋の嵐

「もう嫌だ、意味がわかんない、

もう何もかも嫌だ」

完全なるうつ状態、手首を傷つけたりして不安、怒り、悲しみを

おさえた、不登校になり、

雄真君には会いたい、でも辛い、何もかもが嫌だ

1ヶ月学校を休み、見事復帰、

それが12月のことだった。

ちょっとちょっと学校には行ってたのだが、

すぐ嫌になる、自分の心の弱さを責めて、

髪をぐちゃぐちゃにし、涙でいっぱいの目をがじがじと拭いたものだ、

「私が生まれてきたからいけなかったの？」一人ごとを繰り返した

季節

でも、私が頑張れたのは雄真君の存在があったからだった、

私が落ち込んでるときには、顔見て「なんで怒ってんの？」って

クスクス笑いながら鉛筆でふくらんだほっぺをつんつんと指してきた。

雄真君だけが味方だったとき、

これからは頑張ろう、そう決めて新年を迎えます。

それは１２月の終わりごろ。

不登校と恋の嵐（後書き）

ちょっと特別に私の病み期の気持ちを素直に語ってみました。うつ状態、自分に頑張れって言って励ました日々、そして雄真君の存在、親なんか私の気持ちする知らないで、学校に無理矢理行かせようとした生き地獄みたいな苦しみ
そんな私の地獄が終ったとき、また恋が進展していくんです♪
これからもよろしくおねがいします。

完全に好きだよ（前書き）

完全に雄真君のことを好きになっちゃったとき、

季節は１月・・・

完全に好きだよ

「おはよ・・・」

「おっはよー凛ちゃん！」

花ちゃんだった、いっつもポジティブだなぁ・・・

私も見習わなくちゃ！

「しかし、寒いね、お花でも見に行く？」

「うん！」

～放課後～

「玲奈ちゃん、帰ろっ！」

「うん、待って凛ちゃん」

今の私の席は、雄真君の前っ！もうこの席から

変わらないんだって！！！

「玲奈ちゃん、好きな人いるの？」
「えー、なに急にー！！」
「いるんでしょー誰よー」
「・・・・・一馬君」
「まじでー？！」
「そーゆう凛ちゃんは誰なのよー」
「え？えぇぇ・・・」
「ま、想像つくけどねぇ」
「雄真さんでしょ？」
「うっ！」
「やった☆図星」
「なんでー？」
「好きですオーラ出しすぎ！」
「でも・・・多分雄真君も凛ちゃんのこと好きだよー？」
「え、そ・・・そんなわけないじゃん！」

「うふふふふ、あ！そうだ、知ってる？こんな噂」

「何？」

「花ちゃんと由利ちゃんが雄真さんのこと好きらしいよ」

「花ちゃん？！」

なんで・・・私の恋を応援してるって言ってくれたのに・・・

「へ・・・へぇ・・・」

知らないふりしたのバレてないかな？

そして月日は立ちもう2月全半だ。

雄真君との進展は一向に現れず、ただの仲がいい友達、みたいな感じになってる。

ストレスも溜まり、ちょこちょこ不登校が増えていく。

病み期到来かと思った私も不登校なんて卒業しよう！って気持ちがあれば大丈夫、

そう思った、気持ちが弱いからいけない。

そんなとき、一馬君が励ましてくれた。

この頃雄真君と喋れないから一馬君と喋るようになったのだ。

雄真君への思いが冷め始めたころ、友達にパーティーに誘われた。

しかも雄真君も！その日は、バレンタイン・・・

どうしよう・・・

完全に好きだよ（後書き）

バレンタインにあげるのか、あげないのか・・・実は――――――――と、ここで言っちゃったら面白くないので言いません。

バレンタインＨＡＰＰＹ（前書き）

初めて雄真君とバレンタインに過ごした日です。感想くれると幸いです。

バレンタインHAPPY

どうしよう・・・

えーい作っちゃえ

～パーティー当日～

「これ・・・食べて・・・」

「あ・・・ありがと」

その日はその二言しか交わさなかった。

～何日か経って～

ピンポーン

家のチャイムがなった。

２階に上がってきたのは、

雄真君だった、ボンと私に何かを投げて

帰っていった。それは、ちゃんとラッピングされた

メモ帳だった、ただただ嬉しくて

言葉が出てこなかった。

それから、雄真君とは話さない、すれ違いの日々が過ぎていった。

もう3月・・・6年生の卒業式に5年生の私達も出なければならない。

その次の日から春休み、春休みどうといった事はなく

クラス替えの日、私はただひたすら願ったんだよ。

雄真君と雄真君と同じクラスになりたい。

神様は私にもう1度チャンスをくれた。

同じクラスになった、でもそこから

苦難の道の幕開けだった・・・

バレンタインＨＡＰＰＹ（後書き）

ここからまた地獄のような日々なんです。できれば感想お願いします。

よろしくお願いします

嫌だ、こんなの（前書き）

またまた、私の心の声を語ってみました。
皆さんもこうゆうことってありませんか？
ぜひ、感想をお願いします。

嫌だ、こんなの

私は一揆に友達が居なくなってしまった。

花ちゃんは隣のクラスだった、親友たちともクラス別々

それから仲良くなったのはクラスで一番地味な子と、いじめられている子だった。

その3人は地味なグループとして知られ、いろいろな問題を起こしてきた。

6年生にもなったというのにまた不登校になり気味の日々、友達が迎えに来てくれることも

普通だった、帰りに立ち寄ってくれるのも・・・。

夏休みもあっと言う間

もう季節は9月、ここから私の不登校は悪化していく。

またうつの発生、精神内科に通えって言われた事もあった。

本格的に手首を切って後にもなった。2ヶ月は普通にこなくなった。

いっつもいっつも泣きじゃくって、まるで小さな赤ん坊のように。

ストレス発散の場所なんかもちろんない、ましてや昼ごはんは

ご飯なしのお茶漬けのみ。その頃は我慢のしすぎで体重が一番減ったときだ。

でも、やっぱり雄真君のことが忘れらないのは事実、

変えられない事実だった。

でも、優しい友達茜ちゃんグループほか約7人が

私を助けてくれた、そしてここにいる。

不登校も自力で直したものの、不登校より辛い事が起きたのだ。

嫌だ、こんなの（後書き）

ここから不登校はいっさいないのですが、辛い事は２つ、でも今はクラス全員なかがいいからそんなことは全然ないんです。過去・・・といっても２～３ヶ月前なだけですけど・・・

友情と恋（前書き）

どっちか、どっちか、早くしなきゃ、決めたくないけど決めなきゃいけない私の決断のとき、このときはさすがに辛かったですね。

ぜひ、感想をお願いします。

友情と恋

運動会も無事終えて、次は陸上退会だー！！！

がんばろう、すっごく楽しみ。

新しい親友ともめぐり合えて、雄真君ともいい感じだし、気持ちは絶好調だった。

今は。

男子に、「凛さんも一緒にやろー」

「何を？」

「ゲーム」

「ほら、凛！行くよー」

「あ、まって、茜ちゃんも行くの？」

「決まってんじゃん！！だって男子をつかまえたらその人の好きな人を教えてもらえるんだよー」

「え、ほんとー？じゃぁ私も行くっ！」

「じゃっ早く！」

と私の手を引いて春ちゃんたちのところへ行った。

でも、はぐれてしまった。

「はぐれちゃったね、」

「うん」

「・・・探そっ！」

「あ、いたー！！！！！！！！！！！！！！」

「良かった良かった」

「あ・・・凛」

「どうしたのー？」

「いや、ううん」

「まさか、雄真君捕まえちゃったの？」

「いっ、いや」

「おかしいの　笑」

「春ちゃん掃除！トイレ掃除行こっ！」

「うん」

「聞きたいことあるんだけど、凛は雄真さんがもしも茜ちゃんのこと好きだったら
茜ちゃんのこと嫌いになる？」
「ううん、絶対ならないなぁ、だって友達だもん！」
「ふーん・・・ごめんなんだけど・・・雄真さんの好きな人うちだったんだぁ」
「え・・・」
沈黙の空気に包まれた。私は無口で、春ちゃんと教室に帰った。
でも、ポジティブにいこうって思ったから
それからも春ちゃんとは仲良くやりたいって思ったからここは友情をとった。
「明日は陸上大会だね」そんな会話を続けた。
～陸上大会当日～
朝６時に学校を出て陸上競技場に言ったの♪
「楽しみ～！！！」
「だよねー、でもほかの人が早かったらどうしよー」
「あ、それ私もあるー」

何気ない会話を交わしながら、バスは行く。

やっとついてみんなで固まっておじくらまんじゅう

やったりして遊んでたところに雄真君が来て春ちゃんに

「お前の事が諦めきれない、やっぱり好き」って告白したの・・・

その瞬間、悲しさに包まれただけだった。

春ちゃんは付き合ってる人がいたから無理っていった。

だけど、やっぱり傷ついたよ。

もう好きになれない、あんなやつって。

私はどうすればいいの、なんでそんなに神様は不平等なの

そんな言い訳ばっかり考えてたのは１１月の終わりごろ。

友情と恋（後書き）

ここからの展開がまたすごいですねーはい。

ぜひ読んで感想をお聞かせください

どっちも嫌だ（前書き）

この時期は一番辛かったですね。

感想くれると幸いです。

どっちも嫌だ

「茜ちゃーん」

「・・・・」

「どうしたの？」

「ハッ、あ、ううん」

「良かった」

「帰ろっ」

「うん」

～次の日～

「もうどうしよう、いろいろとヤバい」

「ん～・・・」

「何がヤバいのー？」

「いや、ちょっといろいろとね」

「？」

私はこの頃隠し事をされている気がして聞いてみた。

メールで、返ってきた返事は

「実は雄真さんのこと好きになっちゃったの」

だったの、もちろん涙がでた。

でも、ここは不登校のときに助けてくれた茜ちゃんの幸せを願うべきだと考えたから

ここも友情をとった

「自分の気持ち、伝えたほうがいいよ。じゃないと雄真君可哀想じゃん」

「わかった」

こんなやり取り、

嫌だもん、ずっと我慢されてるのって、

その次の日から茜ちゃんと雄真君は付き合い始めちゃった。

周りの男子は私が雄真君のこと好きだったの知ってたから

いろいろと気を使ってくれた、でもやっぱり忘れなきゃいけない

あのバレンタインの日に貰ったものも手紙も忘れる為に・・・

どっちも嫌だ（後書き）

これ実話です　笑
でもまた神様がチャンスをくれるんです。

さてどうなるのでしょう。
感想をお聞かせ下さい

モノクロな世界（前書き）

ここの前で実は雄真君に告白してフラれているんです。

その告白のときは、「私が語る私の恋」と言う別の小説に書いてあります。

名前は変えてあります、そして本名ではありませんので！！

モノクロな世界

なんか、毎日が色がないようだ・・・

「私・・・そんなに雄真君のこと好きだった・・・の・・・・？」

一人の部屋で、つぶやいた。

次の日、おもおもと学校へ行った。

私の目に見えるのは前で雄真君と茜ちゃんがおたがい頬を赤らめながら喋っている姿、

それも、もはやモノクロだった。

それから5日が過ぎたある日。

「私、・・・やっぱり雄真さんとは付き合えない、

新しく好きな人ができちゃったから・・・ごめんなさい！」

「・・・わかった」

「あ・・・」

「ん・・・あぁ、いや、別に全然大丈夫だって！」

私には、雄真君が涙を浮かべているようにしか見えなかった。
2人が別れて、茜ちゃんに言われた言葉、それは
「雄真さんのこと好きになってあげなよ、凛も本当は
雄真さんのこと好きなんでしょ？」
「えっ・・・」
「・・・」
沈黙した空気が続いた。
「でっ、でも私、1回フラれたんだから好きになっても
好きになってくれるわけないじゃん！！」
「フラれた弱さに漬け込むのがいいのよ！」
「・・・・・」
～次の日～
「席替えをしまーす、くじを引いていってください」
私の番だ、えいっ！あ、2枚引いちゃった・・・
1枚戻して・・・っと

「んーと・・・8番?!どっこかなー」

「無言で席を移動してください。」

「よいしょ・・・」

「よし!ん?ゲッ隣杉村くん!!苦手・・・」

後ろは誰っけ

と振り向いた。それは雄真君だった。

「ぇ・・・あ、ごめん」

顔が熱い、やっぱりまだ好きなのかな・・・?

私・・・

肌寒い12月の初めのころだった。

モノクロな世界（後書き）

今に近づいてきましたよー、

感想もらえたら幸いです。

幸せは顔に・・・（前書き）

ついに新年です。皆様もあけましておめでとうございます。

今に近づいていきますよ。

幸せは顔に・・・

「あけましておめでとう。雄真君！」

「おめでとう」

「っつか、お前の好きな人ってあいつか？」

「えっ違うｗｗ」

「じゃぁ・・・あいつ？」

「ううん」

こんな会話ができるようになって浮かれ気味だった・・・

でもそれがいけなかったんだ

あっと言う間に、１ヶ月

席替え・・・の・・・時期、

あーあせっかく仲良くなれたのになぁ・・・

「では、クジを引いてください、

席移動は今度します、席を覚えてくださいねー」
しかも、雄真君インフルで帰っちゃった・・・
はぁ。

「5番・・・？」
また前の席かぁ

「あっあれ、雄真さんいなきゃクジが・・・」
「あ、じゃぁ私が引いとくから大丈夫」
「ありがとう」

どれどれ、ええい見てやれ！！
2番？
「2番と5番ってどこかな」
見ると結構近かった。
でも今の席がいい・・・

～そして席替えの日～

「雄真君、席替えだよ」

「俺、どこ？」

「んっとね、あそこの席」

と、私はニコニコしながら指さした。

「そっか・・・」

とうなずいた。

「いよいよ、席をかえます。この前クジで引いた席に

移動してください。」

やっとついたぁ。

そんなに席変わった気しないけどね。

私とありちゃんが変わっただけじゃん！

隣は、まさかの幸太郎君、

なんで私ってこう自分が苦手な人の隣になっちゃうのかな・・・？

思い気持ちと胸騒ぎをかかえながら帰った。

もう、新年だというのに気持ちが重い

やけに胸騒ぎがする、

そんなことは自分でも気づいてた。

でも、あんなことになるなんて

今は思っても見なかった・・・

幸せは顔に・・・（後書き）

急展開ですよ、不安と嫉妬でいっぱいです。

あーあ・・・（前書き）

久しぶりの更新です。感想を参考にさせてもらいたいので、感想をください。

あーあ・・・

1ヶ月経ったから、掃除当番もかわるんだったっけ

私は、教室掃除でいいや。

親友2人がいる。でも嬉しくない。

「私、ほうきのほこりとろうっと・・・」

一人でしていたときについてきたのがあやだった。

「凛ちゃん、私も手伝うよ。」

いつも優しい、優しいあやが大好きだった

と、急にあやが

「山田さんておもしろいよね」

「うん、とくに顔が」

「のとくに、口元が」

なんて言ってたら後ろに誰かいるような感じがじた。

あやは爆笑していた。後ろに山田立ってたし！

「あはは、ごめん山田」

「お前、なんの話してたつや」

「あんたの顔はおもしろいよねって話！」

なぜか山田はニヤけた。

「あはははっ」

「なんでお前笑うとや」

「あんたこそ笑ってんじゃん！」

そこにきたのは雄真君だった。

「あーあ、俺山田のせいで諦めんといかん」

なにを・・・？

私は疑問に思い雄真君の顔をのぞきこんだ。

と、とっさに行ってしまった。

それを友達に相談したら、「それって嫉妬だよ？」

って聞き返された。

～その次の日～

「お前それって嫉妬やろー」

みると、雄真君が言われていた。

私は、どん底に落ちた気がした。

また、一からだ。

ハァ、もう嫌だ

なんで私の気持ちも知らずにそんなこと言っちゃうのかなぁ・・・

あーあ・・・・

あーあ・・・（後書き）

お久しぶりです。久しぶりの更新でしたがどうでしたか？もちろんこれも実話です。ブログのほうばっかり構っていたらこうなりました。すいません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2889p/

桜恋

2011年2月19日14時50分発行